

日本スポーツ社会学会会報

Vol.59 号



目次

1. 第23回日本スポーツ社会学会のご案内
大会委員会委員長あいさつ／大会スケジュール
 2. 研究委員会活動報告
 3. 編集委員会からのお知らせ
- 編集後記

日本スポーツ社会学会
Japan Society of Sport Sociology
広報委員会 2014年3月

1. 第23回日本スポーツ社会学会のご案内

1) YOKOSO SAPPORO! : 第23回大会開催にあたって

第23回大会実行委員会委員長 大沼義彦

2014年3月21日、22日と北海道大学を会場に日本スポーツ社会学会第23回大会が開催されます。北海道での大会は、ちょうど10年前の第13回大会（北海道教育大学旭川校）以来、2度目になります。旭川の大会では、大会終了後、歩くスキーのエクスカージョン等も開催され、議論と共に冬のスポーツの魅力も同時に発信された大会となりました。大会実行委員会では、今回も、とも考えました（例えばカーリング体験等）が、会場等の都合もあり特別なエクスカージョンは準備できませんでした。この点、お詫び申し上げます。ただ、札幌は1972年の冬季オリンピック開催都市です。いくつかの「遺産」を見ることができます。情報提供のみとはなりますが、当日、ご案内させていただければ幸いです。

さて、今大会は、一般発表が27題、二つのシンポジウム、実行委員会企画講演、学生フォーラムと充実した内容となりました。一般発表を申し込まれた会員の方々、座長をお引き受けいただいた方々、シンポジウムを準備・企画された研究委員会の皆様にこの場を借りて感謝申し上げます。とくに今回のシンポジウムでは、「体罰」と「オリンピック」が論じられます。ソチオリンピックが終了し、もうすぐパラリンピックが開幕します。札幌市では2014年度予算に冬季オリンピック開催に関する調査費が計上され、再度冬季オリンピックに対する「期待」が高まっているところです。こうした中、札幌にて「オリンピック」を見直してみることの意義は大きいと考えております。「体罰」も同様に、深く掘り下げた社会学的議論が展開される予定です。実行委員会では、北海道らしく「食」をテーマとした企画にしました。「同じ釜の飯を食う」ではないのですが、スポーツや体力、健康を支える「食」をこの機会に見つめ直してみたいと思います。

札幌は、ようやく最高気温が氷点下を上回るようになりました。ここ数日は温かく感じられ、道路のアスファルトも見えるようになりました。しかし、歩道はまだスケートリンク状態です。朝晩の冷え込みも本州のスキー場に近いかもしれません。大会当日の3月21日、22日も気温や天候はどうか分かりません。「温かい服装」と「滑らない靴」をご用意いただければと存じます。

多くの皆様の参加を心よりお待ちしております。

2) 第23回日本スポーツ社会学会のご案内

開催期間：2014年3月21日（金）・22日（土）

会場：北海道大学 学術交流会館

0-0811 札幌市北区北8条西5丁目 電話 011-706-2141

大会スケジュール

3月21日

10:00-12:00 理事会

11:30-13:00 学生会員フォーラム

テーマ：アスリートはどこへ行くのか？：「難民」なのか／「自己実現」なのか

話題提供者： 石原豊一（立命館大学）・吉田 毅（常葉大学）

指定討論者： 高橋義雄（筑波大学）

13:00-16:00 一般発表

16:00-17:00 実行委員会企画講演

テーマ：ナチスのキッチン—来たるべき台所のために

演 者：藤原辰史（京都大学）

司 会：石岡丈昇（北海道大学）

17:00-18:00 総 会

18:30- 懇親会

3月22日

09:00-12:00 一般発表

13:00-16:00 研究委員会企画シンポジウム①「スポーツと教育」②「政治とスポーツ」

①スポーツと教育の場における体罰の位相

登壇者：西山哲郎（関西大学）「体罰」を容認する日本の教育制度と身体観について

奥村 隆（立教大学）「スポーツを教える」ことをめぐるダブル・バインド

加野芳生（香川大学）近代の学校教育制度と暴力：「いじめ」と「体罰」を中心に

司 会：杉本厚夫（関西大学）

②2020年東京オリンピック・パラリンピック招致活動における東北

登壇者：潮 智史（朝日新聞）主語の見えない東京五輪

黒須 充（福島大学）2020年東京オリンピック・パラリンピックの開催と
被災地支援活動

來田享子（中京大学）オリンピック・ムーブメントと開発・災害支援

司会：坂なつこ（一橋大学）・高峰 修（明治大学）

詳細は学会 HP をご参照ください：<http://jsss.org/theme/custom/media/programme.pdf>

2. 研究委員会活動報告

研究委員長 西山 哲郎

前回の学会大会から、学生フォーラム企画はメンバーが刊行した著書をベースに構成してきました。今回の北大での大会でも、関西学生フォーラムの世話役である石原豊一氏の著作を発想の出発点とするため、まずは10月に書評会を開きました。

その活動報告を以下に掲載しますので、今次大会の学生企画シンポジウムの予告編としてご覧いただけたら幸いです。

関西学生フォーラム書評会活動報告

石原豊一『ベースボール労働移民：メジャーリーグから「野球不毛の地」まで』（河出書房新社、2013）を読む

日時：2013年10月19日（土）14：00～17：00

会場：龍谷大学セミナーハウス「ともいき荘」2階研修室

著者：石原豊一氏（立命館大学）

評者：窪田暁氏（国立民族学博物館外来研究員）

小坂亮太氏（中日新聞北陸本社編集部）

小丸超氏（龍谷大学大学院社会学研究科研究生）

関西学生フォーラムでは、日本スポーツ社会学会第23回大会での学生フォーラムのイベントとして、上記の書評会を行なった。対象となった石原豊一氏の『ベースボール労働移民：メジャーリーグから「野球不毛の地」まで』は、世界を股にかけたフィールドワークから、これまでのスポーツ労働移民研究では捉えきれなかった位相とそのリアリティを多角的に論じたものである。当日は、本書の鍵概念であり、人材獲得や放送網の拡大、マーチャンダイズの展開などを含めた資本の論理によるネットワークの拡大を意味する「ベースボール・レジーム」をめぐって、活発な議論が展開された。

特に議論の焦点となったのは、石原氏のいう「ベースボール・レジーム」が地球規模で拡大するなかで、その周縁に立ち現われてきている資本の論理のみに回収し尽くされない事象をどのように考えるかということであった。第4章で取り上げられている低賃金で競技レベルも低いイスラエルリーグに参加する選手の事例からは、休暇を利用してプロ野球選手という夢を体験する「バケーション型」や、確固たる社会的地位を築けないままに漠然とした夢を追い求める「自分探し型」といった、従来の枠組みでは捉えきれない経済的理由とは異なるスポーツ労働移動が見出されている。また第6章では、安価な労働力として一部の有望選手のために利用される「かませ犬」となっている例が紹介されていた。日

本の独立リーグにおいても、たとえ少額でもプレーで報酬を得られるというかけがえのなさを求めて参加する選手は後を絶たない。そこには、野球を「逃避」や「自己実現」の手段として現代社会を生き抜こうとする若者たちの姿があるように思われる。今回の書評会では、彼らが直面している現実に向けた研究の必要性が確認された。

以上のことを踏まえて、関西学生フォーラムは、日本スポーツ社会学会第23回大会において「アスリートはどこへ行くのか? : 「難民」なのか/自己実現なのか」と題したシンポジウムを開催することにした。アスリートの実状やセカンドキャリア形成などについて多くの会員の皆様とともに議論することで、学会が今後取り組んでいくべき課題を見つめ直したい。

浜田雄介 (広島市立大学)

日本スポーツ社会学会第23回大会学生フォーラム

「アスリートはどこへ行くのか? : 「難民」なのか/自己実現なのか」

日時 : 2014年3月21日 (金) 11:30~13:00

会場 : 北海道大学学術交流会館第4会議室 (C会場)

話題提供者 : 石原豊一氏 (立命館大学)

吉田毅氏 (常葉大学)

指定討論者 : 高橋義雄氏 (筑波大学)

3. 編集委員会からのお知らせ

編集委員長 松田 恵示

現在、第22巻1号の編集作業が大詰めを迎えています。特集論文は、3月に北海道大学で行なわれる学会大会の研究委員会シンポジウムのテーマとなっている「体罰」についてです。シンポジウムを先に行うのではなく、研究誌での特集を先行させてシンポジウムと「シンクロ」させるというのは、研究委員会と連携した今回初めての試みです。どうぞお楽しみにしてください。

また、投稿論文、研究ノート、書評で今号の内容も構成されていますが、今年度は、論文投稿数が、例年に比べて若干少ないように感じています。査読体制や、校正、ネイティブチェックの仕方等、今年度の編集委員会では、新しくいくつかの工夫や改善を図っています。

次号への投稿論文は、平成26年3月30日(消印有効)が締め切りです。ぜひとも、多くの論文投稿をお待ちしておりますので、ふるってご投稿いただけますようお願い申し上げます。

